

原稿校了後の前兆変化について

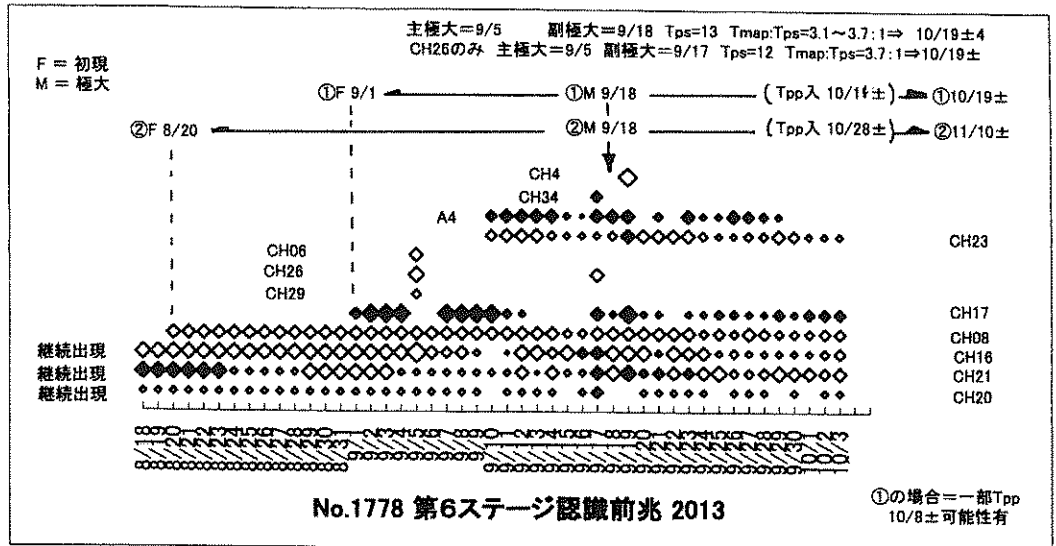
八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆 続報 現況報告
第6ステージ 前兆継続 明確な2つのピークについて考察

2008年7月初旬から5年3ヶ月と云う過去例の無い長期に渡って、段階的に変化し、多数のピークを現して前兆が継続している、No.1778特殊前兆についての続報です。

9/5のピークから第6ステージ認識です。前情報で記したとおり、今までの第6ステージの初現～極大認識は間違っており、本日10/3夕刻現在も前兆が継続出現しておりますため、確実に10/5±発生の可能性は完全に否定できません。

前情報に記しましたが、CH17糸状特異を継続出現と認識し、CH17特異初現 9/1を9/18ピーク(9/17と9/19の中心)に対応させますと、10月19日±の可能性も計算できます。



No.1778 第6ステージ認識前兆 2013

2ヶ所に出現したピーク→主極大・副極大の可能性と考察

No.1778前兆の今までの5ステージ前兆群には、少ない場合6個のピークが、多い場合は12個のピークが出現観測されました。しかし、今回の第6ステージでは、現在までに明確なピークは2ヶ所しか認められません。以前は9/13±頃のA4特異出現を中心をとってピークの可能性とし、9/17ピークと9/19ピークを各々別とし、合計で4個のピーク認識をしていましたが、上図のとおり、全体を見ますと、9/5のピークの他は、前兆全体が山型となった頂上に位置する9/18(9/17-9/19中心)ピークが認識できます。前兆全体からは、この9/18±ピークが極大と認識しやすいですが、9/5も明らかにピークに見えます。右図の前兆レベル変化図を見ると明確です。

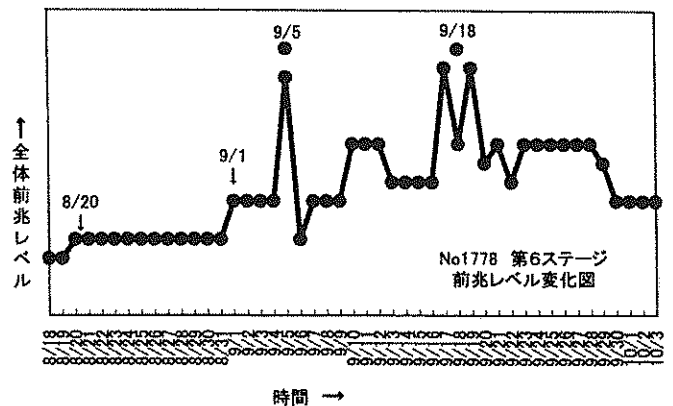
第6ステージ前兆群の全体からは、9/18±が極大に見えるのに、何故、9/5にもピークが出現しているのか? 何か理由がある筈です。そこで、地殻地震前兆特有の主・副極大前兆型の可能性を考えてみました。(PHP新書「地震予報に挑む-191頁」「地震予報-305頁」参照)

二つのピークが出現するタイプで、二つのピーク間をTpsとし、最初のピーク(主極大)から地震発生までの期間=Tmapとしたとき、Tmap:Tps=※平均 3.7:1 と云う経験則があります。

※(先の主極大と二番目の副極大のピークが形が同等の場合は、3.7:1ですが、副極大が主極大より緩やかな形の場合は、3:1に近い比率となり、逆の場合は4:1に近い比率となる)

今回は、主極大=9/5 副極大=9/18 Tps=13日(全体からは副極大緩やか)

Copyright 2013 YSBO 八ヶ岳南麓天文台



従って、仮に本認識が正しい場合は、Tmap:Tps=3.1~3.7:1比率で発生日が求められる可能性があります。これを適用しますと、10/14~10/23が計算され、中心表示としては10/19±4の可能性となります。

ここでCH26だけは、主極大と副極大の各々両方共に前兆が出現しています。主極大=9/5 副極大=9/17で、9/5の方がレベルは高く、ピークの形は同等です。従って、主副極大型を当てはめると、Tmap:Tps=3.7:1が適用できます。CH26だけを見ますと、Tps=12日から10/19±が計算できることとなります。

今回の第6ステージ前兆群は過去出現の5つの前兆群とは明らかに異なり、ピークが多数出現しておりません。二つ出現したピークの意味を考えると、主副極大型の可能性が否定できず、全体の極大に見える9/18に対しては、9/1を初現としますと、Tmap:Tps=20:13 経験則から10/19±と、主副認識と同じ時期となることは偶然でしょうか?

8/20を初現、9/18極大の関係では、11/10±も計算できますが、10/11±頃に前兆終息が認められれば、10/19±の可能性が高まります。本認識が正しいか否か観測を続け続報致します。